

「次世代シーケンサーを用いた漿液性卵巣癌の原因遺伝子の同定」のお知らせとお願い

いわゆる「がん」は遺伝子の変化によって起こってくるのが様々な研究でわかってきました。「遺伝子の変化」と言ってもいわゆる「遺伝病」という意味ではなく、ある組織において、ある時点で「後天的に遺伝子の変化」がおこることでもがんがおこってくるということですか、必ずしも子孫ががんになりやすいというわけではありません。

防衛医科大学校病院産科婦人科では卵巣がんの中でも漿液性腺がんと診断され、治療をうけた患者さんの治療転帰や予後と関連するような遺伝子の変化が、手術で摘出された卵巣の組織でおこっていないかの検討を行っています。

今後、卵巣がんの患者さんに対してどのような治療を行ったらよいか、再発する可能性が高いと考えられる患者さんにはどのような追加治療をしたらよいかの指標になることが期待されます。新潟大学、国立遺伝学研究所、鹿児島市立病院の先生方と総合的に検討を行います。

具体的には、防衛医大病院にて 1997 年から 2010 年の間に初回治療を開始した漿液性卵巣がんの患者さんの臨床情報、手術での摘出検体を全て匿名化したうえで新潟大学の研究事務局で解析します。

防衛医大で治療をうけた患者さんについては、本校個人情報管理指導者の指導の下、本研究に中立である防衛医大産科婦人科、笹秀典准教授が個人情報取扱者として責任を持って匿名化を行い、情報漏洩がおこらないように留意します。本研究は、今後、研究のためにあらたに患者さんから検体を採取したり投薬をしたりすることはなく、これまでの外来及び入院治療での診療録情報(カルテ)、外科的に得られた摘出標本を用いる後方視的研究です。この研究は防衛医科大学校倫理委員会の承認をうけ、実施されています。また、共同研究機関もそれぞれの倫理委員会の承認をうけて参加しています。

しかしながら、ご自分の治療経過等の臨床データ、摘出標本を研究に使わないで欲しい、というご希望が有れば、ご連絡をいただけますようお願いいたします。なお、研究への使用の拒否の意思を表明されても、防衛医科大学校病院産科婦人科における診療には全く何の影響もなく、いかなる意味においても不利益をこうむることはありません。

連絡先

防衛医科大学校病院産科婦人科

高野政志

電話 04-2995-1511